

第1回 合同研修会

講演要旨集

日時：平成20年12月7日（日） 午後1時～6時（正午12時から世話人会）

場所：パシフィコ横浜「アネックスホール」

内容：

12:00-13:00 世話人会（昼食付き）

（以下は合同研修会）

司会進行：日置 智津子先生（東海大学医学部 東洋医学講座 講師）

13:00-13:10 開会の挨拶：猪子 英俊先生（東海大学医学部 医学部長）

13:10-13:30 東海大学医学部における漢方医学教育とその成果（東海大学医学部
東洋医学講座 准教授 新井 信）

13:30-14:30 模擬授業（北里大学 東洋医学総合研究所 副センター長 伊藤 剛先生）

14:40-16:10 特別講演1（慶應義塾大学医学部 漢方医学センター センター長・准教授
渡辺 賢治先生）

座長：梅村 敏先生（横浜市立大学医学部 医学部長）

16:20-17:50 特別講演2（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 社会・行動医学講座
心身内科学分野 教授 乾 明夫先生）

座長：尾崎 承一先生（聖マリアンナ医科大学医学部 医学部長）

17:50-18:00 閉会の辞：相澤 好治先生（北里大学医学部 医学部長）

漢方医学発展のための大学の役割

～臨床・研究・教育・国際化・社会貢献～

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

渡辺賢治

はじめに

わが国における漢方医学を取り巻くこの10年の環境の変化には目を見張るものがある。明治維新後の漢方医学の衰退を支えてきたのは主に薬剤師とごく一部の医師であった。それが1976年の医療用漢方製剤の大々的登場により、医師の使用者が漸増してきた。その多くは患者と密接な関係を保ってきた開業の医師であった。また、その使用法は西洋医学病名に対して用いられる、という漢方本来の用い方を軽視したものであった。1996年の小柴胡湯による間質性肺炎による死亡例の報道以来、西洋医学のコンテキストで漢方を用いることに対し、疑問視する声が高まり、漢方薬は漢方医学の基本の上で使うべき、という流れから漢方の適正使用、基本コンセプトの教育が強調されるようになった。2001年の医学教育モデルコアカリキュラムに漢方教育が盛り込まれたことは象徴的な出来事であった。それを機に、それまで漢方を支えてきた開業医師のみならず大学における漢方というものの在り方が問われるようになった。

大学漢方のはじまり

現在は全国80の医学部・医科大学すべてにおいて漢方教育のなされており、漢方外来が開設されている大学病院も8割を超えている。しかしながら一部の大学を除き、大学漢方の歴史はまだ浅く、各大学とも手探り状態であろう。

慶應義塾大学医学部においては平成4年度に株式会社ツムラの寄付講座としてスタートし、平成20年度からは漢方医学センターとして大学組織、病院組織、大学院医学研究科として活動している。大学としての機能としては教育・研究・診療は当然のことであるが、それに加え、国際化、社会への貢献ということも重要と考え活動を行っている。

大学における漢方臨床

臨床においては、臓器にとらわれない全人的医療として種々の診療科との連携が可能である。現在行っている連携は皮膚科とのアトピー外来、婦人科との抗加齢外来、麻酔科との緩和医療などである。たとえば皮膚科とは共同でアトピー生活指導外来を立ち上げ、月1度の合同ミーティングを行っており、近々集団指導も行う予定である。

大学における漢方教育

卒前教育は2段階となっており、第3学年で漢方の基礎薬理学を教える。基礎医学を学んでいる学年に漢方の基礎概念を覚えるのは抵抗があり、物質としての漢方薬の基礎薬理学に興味を持ってもらう。その後第4学年で臨床の講義を行うが、治療各論よりは診断についての知識をつけることを目標にする。その後クラークシップ、初期研修期間は選択として、後期研修は独立したプログラムとして継続した教育を行っている。

その他本学が力を入れている自主学習のカリキュラムでは第4学年の1学期間の半分を各教室に配属され自由に研究ができるが、漢方は人気のある科目の一つである。

漢方教育はそれ単独で存在することはあり得ないことであり、常に医学教育全体の流れの中で、いつどのような教育を行うのが相応しいかを考慮しなくてはならないことを強調しておく。現在の医学教育は複雑多岐にわたっており、卒前教育では漢方に対する関心を惹起できればそれで成功であり、卒後教育を充実すべきというのが医学部FD委員長としての立場からの私見である。

大学における漢方研究

研究に関しては漢方独自のコンセプトを崩さずに、その尺度としては最新のテクノロジーの恩恵を受け進めることにしている。現在研究の中心は中枢と腸管である。一例を示すと人参養栄湯が脱髄神経細胞の脱髄鞘化をすることが可能であり、そのメカニズムは最新テクノロジーを駆使して解明することが可能である。こうした自前の研究成果を学生教育にも反映させることで、学生の関心を高めることができる。

臨床研究は医療情報の時代を見据えた研究を推進している。

大学における漢方国際化・社会貢献

国際化はNIHグラントを助成されての海外との共同研究や、海外での学会発表、海外からの医師・医学生の受け入れなどを行っている。

再度に社会貢献に関しては、市民講座を開催したり、厚労省の班研究において家庭医・総合医における漢方教育のあり方を検討している。また、WHOの活動にも積極的に参加している。

最後に

大学漢方はまだ緒についたばかりである。あるべき姿についての模索は今後も続くであろう。本学も試行錯誤を繰り返しながら社会での認知を高める努力をしていく覚悟である。